2003 早大学位記 3677 報告番号 甲 乙
3677-2

W 学位論文 3677 2

【課程内】

博士（人間科学）学位論文　概要書

セクシュアリティと親密性の研究

ともに暮らす同性カップルのインタビューを通じて

THE STUDY OF SEXUALITY AND INTIMACY

Via the Research of Cohabiting Homosexual People

２００４年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

志田　哲之

Shida Tetsuyuki

研究指導教員：　濱口　春彦　教授

本研究ではまず、3つの問題提起を行った。一つめは日本における同性愛者のアイデンティティの問題であり、二つめレズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズを日本の同性愛研究に適用可能かという問題であり、三つめは同性カップルの意識の問題であった。

このような問題提起の基底にあるのは、既存の研究への批判的な立場である。同性愛に関する研究は1990年代以降、さまざまな形で行われてきたが、これらの研究の多くは、欧米での議論をそのまま日本に適用させようとしたり、あるいは抵抗運動の論理への貢献をはたそうとするものであり、日本で生活する同性愛者自体の調査研究があまり行われていないことが、その批判の骨子である。

ところが同性愛に関する研究に着手する際には、必ず行わなくてはならない手続きがあった。それは同性愛に関する研究が主にセクシュアリティ研究の領域で行われており、また本研究もセクシュアリティ研究の末席に属しようとするものであるため、1章ではセクシュアリティとはなにかという、いまだ進行中の議論を一番始めに整理する必要があった。もちろん、構築主義的視点からみれば、セクシュアリティの定義活動は現在も進行中であり、この章では現時点でのセクシュアリティとはなにかという問いへの回答である。このような構築主義的視点は同性愛の定義にもまた用いた。

そして日本の同性愛に関する社会学的な研究の概観はこれまで行われていなかった。とはいうものの、同性愛に関する研究が日本より盛んな英語圏ですら、1998年にようやくアンソロジーが出版されたくらいであるから、これはそれほど不思議なことではないのかもしれない。よって2章では約10年間の社会学分野における同性愛に関する論考の概観を提示し、その特徴を明らかにしなくてはならなかった。社会学において同性愛に関する研究は徐々に蓄積されているが、多くは理論的な研究や、抵抗運動の理論に結びつくような研究を行っていたといえた。

3章では同性愛に関する研究における当事者問題について考察を行った。このような考察の必要性を感じたのは、レズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズなどの理論を用いる論者に対して違和感を覚えざるを得なかったからである。これはレズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズの理論研究においても、またこれらの理論を用いた事例研究であっても同様であった。このような違和感の源の一つとしてアイデンティティの扱い方に注目した。そして抵抗活動と密接に結びつく欧米のアイデンティティと抵抗運動があまり活発ではない、同性愛者であることがあまり問題化されない日本の同性愛者のアイデンティティとを同じ文脈で理解することは困難であると考えた。

このような問題提起から、4章ではライフヒストリー研究の手法に準拠して行ったインタビュー調査の結果をもとに、日本の同性愛者のアイデンティティを考察した。ここでは性的なアイデンティティが社会的な言説をもとに構築されたかについて論じた。そしてここで提示された同性愛者のアイデンティティとは、社会のさまざまな領域にある言説をもとに構築されていき、そしてそのアイデンティティは可変的、かつ流動的なものであった。

欧米における肯定的なアイデンティティと抵抗運動の成果として、「親密パラダイム」の出現と、制度の獲得への運動が挙げられる。5章ではこのような欧米での動向を鑑み

て、日本における同性愛者にとってのパートナーシップや家族がいかなるものかを探索的に研究する必要があると提起した。そして同性愛者とパートナーシップや家族について既に論じている家族研究の検討を行った。

6章では同居する男性同性愛者のカップルインタビューのデータの提示と分析・考察を行った。ここではアイデンティティ、ふたりの関係を説明するための語彙、家族意識、婚姻制度について論じた。アイデンティティはアイデンティティの政治化の文脈とは距離のあるものであった。ふたりの関係を説明するものは、きわめて私的な意味を持つ語彙を用いてた。家族はだれかという問いにはまず第一に定位家族が想定され、その後同居するパートナーを挙げるケースが多かった。婚姻制度に関しての評価は分かれたが、肯定的な対象者も否定的な対象者も、同じように社会からの同性愛者に対する否定的なまなざしについて言及していた。

ここまでの議論で導き出せることは、アイデンティティの政治化とは距離のあるアイデンティティと、抵抗運動へと結びつかない意識が見受けられることであろう。同性愛を肯定する言説は、1990年代初頭からすでに流通していたし、この言説は今日においてもなお増大し続けている。それにもかかわらず、アイデンティティの政治化には結びつかない。むしろアイデンティティの政治化には結びつかない形で、同性愛の肯定化が進行していると考えられる。そしてこのような流れの中で同性愛者の親密な関係もまた、不満の程度の差こそあれ、社会に対して声を大にしないまま、なかば現状肯定的に営まれていると言える。このような人々に対してレズビアン／ゲイ・スタディーズやクィア・スタディーズといった理論の適用は困難だといえる。

そしてここで本研究の目的のひとつである、問題化されないありさまを記述することははたされたように思われる。なぜ、このような相違が見られるのだろうという問いについてはまた別の研究課題として設定したい。

つづく同性愛者のアイデンティティと親密性を明らかにするという目的もまたはたされたかに思われる。もちろんサンプル数やジェンダーをはじめ、さまざまな面で限定されたサンプルの質的なデータをもとに議論を展開したために、これをもって日本の同性愛者のアイデンティティと親密性の議論のすべてを網羅できたとは言えないが、ひとつの指標が指し示せたであろうと自負する。

最後の7章では、本研究のまとめとして日本の同性愛者のアイデンティティ、親密性の現状と将来について論じた。